楢崎皐月に関する資料について

寺　石　悦　章

1　はじめに

本稿は、楢崎皐月（1899-1974）に関する資料（書籍・雑誌・ウェブサイト等）にどのようなものがあり、それぞれが資料的にどのような性質のものであるか[1]を明らかにすることを目的とする。とはいえ楢崎という人物自体が、一般にはほとんど知られていない。始めに楢崎とはどのような人物であるかを、簡単に説明しておくことにしよう。

楢崎と結びつけられる最も代表的なキーワードは、おそらく「カタカムナ」そして「イヤシロチ」だと思われる。このうち「カタカムナ」とは、『日本書紀』や『古事記』よりもはるかに古い時代の文献だと言われている。そのような文献はカタカムナ以外にも複数存在するとされ、「古史古伝」「超古代文書」などと総称されるが、カタカムナはその中でもかなり特異なものとされる。それは、大半の「超古代文書」が広義の歴史書と呼びうるものであるのに対し、カタカムナは科学書とでも呼びうるような内容だとされるためである。

カタカムナは、カタカムナ文字と呼ばれる特異な文字で記されているが[2]、苦心の末にこのカタカムナ文字を解読し、カタカムナ文献を世に出したとされる人物が、この楢崎に他ならない。これを偉大な業績だと考える人もいるが、そもそもカタカムナ文献なるものは後世の偽作であり[3]、そのようなものを真剣に研究すること自体が理解できないとする人々も多数存在する。

もう一つのキーワードである「イヤシロチ」とは、カタカムナ文献に出てくる言葉の一つである。作物はよく実り、仕事ははかどり、人々は健康になるなど、すべてに

---

[1] 本稿で特に重視しているのは、それぞれの資料の内容が独自の情報であるか、他の資料の内容に基づいているかという点である。

[2] 古史古伝、超古代文献と総称される文献は、平仮名や片仮名が成立する以前から存在するとされており、特異な文字（神代文字などと総称される）で記されていることが多い。また文字の種類は文献によって異なることが多い。なお、片仮名（カタカナ）はカタカムナ文字から作られたとも言われる。

[3] 古史古伝、超古代文献などと呼ばれる諸文献の真偽については、江戸時代以前は積極的に肯定する人が少なくなかったものの、現在では否定的に見る人が圧倒的に多くなっている。このカタカムナについては、そもそも楢崎が捏造したものだと推測する見解もある。

おいてよい方向に向かわせる力をもった土地だといえようか[4]。

楢崎は、カタカナム文献に記されているイヤシロチが実際に存在することを、電位の測定等によって科学的に立証している。のみならず、イヤシロチではない土地をイヤシロチに変える方法まで具体的に提示している。後述するように、このイヤシロチという言葉は、近年になって船井幸雄[5]がしばしば使用するようになったため、比較的広く知られるようになってきている。その船井は、楢崎について次のように紹介している[6]。

> 楢崎さんは明治32年（1899年）生まれで、昭和49年（1974年）に75歳で亡くなっています。この人は一種の天才です。(中略)その優れた開発能力を認められ、産業界や軍部の一部に重用されるようになっていくのです。
>
> 例えば、20代のときに特殊絶縁油を発明して、その事業化に成功しています。その後には人造石油を発明し、その技術は軍に採用されました。戦時中は軍の要請で満州に派遣され、陸軍製鉄所長兼技術研究所長を務めています。満州を占領したソ連軍は、この日本人天才科学者を血眼になって探し回ります。しかし彼は昭和20年に無事に日本に帰ってきました。（以下略）

その後の楢崎の研究が極めてユニークなのだが、その内容を簡潔に紹介することはほとんど不可能だといえる。というのも、彼が取り組んでいた課題は、一般の常識では理解できないものだったからである。彼の研究の一部は実際に具体的な成果をあげたとされている。ただしその内容は一部を除いてほとんど理解されておらず、彼の生み出した成果はもちろんのこと、彼の発想全体を、単なる誇大妄想だと考える人も少なくない。とはいえ、本稿は楢崎の研究内容について吟味することが目的ではないし、もとより筆者にはそのような能力はないので、その問題には立ち入らないことにする。

2 楢崎皐月に関する資料が少ない理由

楢崎は一部の人々から「天才的な科学者」とまで言われている。とはいうものの、学界から評価されているわけではないし[7]、そもそも彼の存在自体がほとんど知られていないという状況にある。加えて、彼に関する資料が少ないということが、彼につい

---

[4] カタカムナについてと同様、そのような土地の存在を否定する人もいる。

[5] 船井については本稿**5. 2**を参照。

[6] [船井 2004：76-77]。なお本稿では引用の際、文意を損なわない範囲で、漢数字を算用数字に改めたり改行を無視したりすることがある。

[7]「彼（楢崎のこと‥‥寺石注）から恩恵をうけ、又、彼の非凡な天才に触れて、その偉大さに感服した者はあっても、彼を堂々と支持し、その価値を正当に認めて、彼を力づけた智識人は、殆ど無かったようである」([第8号：127])。

ての研究を非常に困難なものにしている。

楢崎に関する資料が少ない理由については、さまざまな側面から考えることができる。ここでは一応、楢崎本人の性格（**2. 1**）と、彼を取り巻く状況（**2. 2**）、そして彼の研究内容（**2. 3**）という3つの面に分けて見てみることにしたい。

2. 1　楢崎本人の性格

楢崎に関する資料が少ないことは既に述べた通りだが、中でも彼の人物（性格等）に関する資料は殊のほか少ない。ここでは、後述する楢崎研究所ウェブサイトに掲載されている松原喜一の述懐[8]を主要な手掛かりとして、楢崎の性格について見ていくことにしよう[9]。なお松原は、楢崎の指導のもとで研究に従事した人物である。

まず楢崎は、自分の素姓を語らない人だったという。「先生（楢崎のこと‥‥寺石注）は自分の素性は決して言わない人でしたが、僕は山口県の吉田松陰の松下村塾の教えを受けられた人なのかなと思ったくらいです。吉田松陰そのものでしたよ」と述べている。

また後述するように、楢崎には研究成果の一端をまとめた『静電三法』という講座テキストがあるが[10]、彼の後継者として指名された宇野多美恵ですら[11]、その存在を楢崎から聞いていなかったという。それほどまでに自分について語らなかった人物だということになろう。また松原は次のような言葉を記憶しているという。「僕は研究家なんだ。研究家というものは表に出るものではない。」

研究内容についても、それを「即、製品にして販売して儲ける」といった発想は皆無の人物だったらしい。「楢崎先生は（中略）『研究家として俺が考えて作った物を、民間の会社の金儲けのために使うというようなものの考え方では駄目だぞ。』といわれ、また、そんな考えは絶対に許さなかった方でした。」「『どんな優れた技術も一部の資本家や野心家に奉仕する結果となっては研究家の喜びはない。自分たちの開発した技術で、一般の人々が幸福のために上手に活用して喜んでもらえる。これが僕ら研究者の楽しみだ。』‥‥と、人の知らない、隠れたところで喜び合っている。そんな姿が研究

8　楢崎研究所ウェブサイトについては本稿**5. 5**を参照。また松原喜一については本稿**5. 1**を参照。

9　後述するように、『相似象学会誌　相似象』（本稿**3**を参照）は楢崎に関する最も豊富な資料である。しかし事実上の筆者といえる宇野多美恵が楢崎を「崇めている」姿勢が強く見られることから、楢崎の性格を知るための資料としては、ここにあげたもののがより相応しいという印象を筆者はもっている。

10　本稿**4**を参照。

11　宇野多美恵については本稿**3**を参照。この件については特に**3. 3**を参照。

家・楢崎グループの姿であり、真の喜びとされておられました。」
このような人物であれば、当然のことながら、自らの研究成果がどのように生かされるかについては、大きな関心をもっていたであろう。特定の人物やグループのために利用されないようにするため、成果の発表等についても特に慎重であったものと思われる。

2. 2 楢崎を取り巻く状況

楢崎の研究があまりにも壮大なものであり、同時に実用化に成功すれば莫大なメリットがあると考えられたことから、大変な制約が課せられたという事情もあったらしい[12]。そのような内容であれば、国家も民間も、さらには外国の機関も関心をもつのは当然のことであろうし、彼らが資金などの面で援助を申し出る可能性は高い。しかし援助を受けるとなれば、確かに資金的には潤うであろうが、出資者が研究に口を挟むことを拒めなくなる[13]。
また研究内容のスケールが壮大であったことから、スパイやマスコミなどを避ける必要もあったという。その結果、楢崎らのグループは表に出ずに活動することを決め、それを実行したとされている。
また次のような話もある。楢崎の第一の部下であり、海軍の技術研究所の所長を務めた徳永という人物がいた[14]。彼は敗戦後にソ連[15]から声をかけられたがそれを拒否し、その結果、殺されてしまったという[16]。こうした事件があって以来、研究グループのメンバーはいっそう用心深く地下に潜り、研究内容と自身の保全を自衛せざるを得なくなった。ちなみに楢崎自身もGHQから誘いがかかったが、バカを装って逃げ切ったとされる[17]。
地下に潜った理由は他にもあった。「私達が、研究途上の技術を金に換える方法はいくらでもありながら、用心深く、ひたすら研究内容を秘匿して来たのは、威力的な天然の利器が整備されるまで、その技術をストックする事が最も必要であり、それが、私達の軌道修正運動のポテンシャルを高める所以であると考えたからである」ともい

---

12 この項の内容は[寺石 2010]と重複する。
13 後述するように、少なくとも星一からは援助を受けていると見られることから、楢崎はすべての援助を拒否していたわけではないものと考えられる。
14 終戦時に海軍技術研究所所長であった徳永栄だと思われる。
15 [第8号：105]には「ロシヤ」とあるが、「ソ連」に改めた。
16 世間的には交通事故として処理されたという（[第8号：105]）。なお、この件については事実誤認が含まれている可能性がある。寺石[2010]を参照。
17 [第8号：105]。

いう[18]。

2.3 楢崎の研究内容

そもそも彼の研究内容が一般の常識とはかけ離れたものであったため、ほとんどの人から理解してもらえないという事情もあったらしい。楢崎の研究は、家族にすらまったく理解してもらえず、家では狂人扱いされていたという[19]。このような事情もあって、内容の公表にはことさら慎重であったと考えられる。

3『相似象学会誌』と相似象学会

これまで見たきたような事情が複雑にからまりあってのことであろうが、我々の手元には楢崎に関する資料はあまり残されていない。そのような状況の中で、楢崎についての、ある程度まとまった、ほとんど唯一の資料ともいえるのが『相似象学会誌　相似象』である。

以下の叙述から明らかになるように、楢崎について調べる、楢崎について語るという場合、好むと好まざるとに関わらず、『相似象学会誌　相似象』が最も重要な、中心的な資料にならざるを得ないという現実がある[20]。従って『相似象学会誌　相似象』の資料としての性格については、特に詳細に検討しておく必要がある。具体的には、楢崎と『相似象学会誌　相似象』とはどのような関係にあるのか（**3.2**）、また実際に『相似象学会誌　相似象』を執筆し、それを編集してきたのはどのような人物であり、楢崎はどのような関係にあったのか（**3.3**）等々である。

ここではまず、外から見た『相似象学会誌　相似象』の概要を紹介し（**3.1**）、その後で上記の件について検討することにする。

3.1『相似象学会誌　相似象』

『相似象学会誌　相似象』は、不規則な面、風変わりな面をさまざまな意味においてもつ雑誌であり、「学会誌」という言葉から一般にイメージされるものとは大きく異なる。なお、内容にまで言及するとなると膨大な説明が必要になってしまうため、ここではできる限り内容には踏み込まないことにする。

この雑誌の創刊は1970年10月であり、最後の号となる第16号の発行が2004年11月であるから、単純に考えれば34年にわたって発行され続けた雑誌ということになる。当初は1年に2冊というペースで刊行されているが、その後の発行はかなり不

---

[18] [第8号 : 6]。

[19] [第8号 : 102, 103-104]。

[20] 本稿自体が、その記述の多くを『相似象学会誌　相似象』に依存している。

規則になっており、数年間まったく発行されていない期間もある。

また創刊号から第16号の間に、特集号が1冊、別冊が9冊も発行されている。（つまり合計で26冊発行されていることになる。）特集号や別冊が発行されること自体は決して奇異なことではないが、通し番号がついている雑誌が 16 冊しかない中で、通し番号から外れた雑誌が 10 冊もあるというのは、あまり例がないと言わざるを得ない。しかも、これら特集号の1冊と別冊の9冊をあわせた計10冊は、例外なく第10号と第11号の間に発行されている。具体的にいえば、第10号の後に第10号の別冊が1冊発行され、続いて特集号が発行され、さらに第11号の別冊となる8冊が続き、その後で第11号が発行されるという順序になっている。そしてその後は、第12号から第 16 号が順次発行されている。このような発行のされ方も、あまり例がないことだといえよう。

また、雑誌のサイズやタイトルが途中で変更されている他[21]、厚さ（ページ数）や価格などにも非常に大きな変動が見られる[22]。

3.2 相似象学会と楢崎皐月

では、この雑誌と楢崎とはどのような関係にあるのだろうか。号によって内容にかなり大きな違いが見られるが、基本的には楢崎による研究成果[23]の紹介、普及といった目的をもっているように読み取ることは可能である。

『相似象学会誌　相似象』では、この雑誌は楢崎にとって特別な意味をもつもので

---

[21] 雑誌のサイズは途中で変更されている。第8号以前は小さいサイズ、第9号以降は大きいサイズになっている。創刊号から第 8 号までの小さいサイズは新書のサイズ、第9号以降の大きいサイズはA5版（見開きでA4版）のサイズである。

タイトルも途中で変更されている。創刊号から第9号までの表紙には「相似象学会誌　相似象」、第10号以降の表紙には「潜象物理研究　相似象学会誌　相似象」と記されている。ただし本稿では、混乱を避けるために「相似象学会誌　相似象」に統一する。

[22] 雑誌の厚さ（ページ数）は号によって大きく異なる。新書サイズの創刊号は 100 ページに満たないが、同じサイズの第5号は360ページを超えている。A5版サイズになってからは200〜300ページほどの号が多いものの、唯一の特集号は500ページを越えている。

上記のような事情、特にページ数の変動に伴ってということであろうが、値段もまちまちである。創刊号は500円だが、それ以降は号ごとに値段が異なる。ただし第11号〜第16号は4000円で固定されている。なお、最も厚い特集号は4500円である。

[23] その土台となっているのはカタカムナ文献の解読である。

あったとされており、次のような注目すべき記述がある。楢崎は「相似象学会の発足にあたり、過去の一切の著述、講演原稿等を破棄し、手元に一冊の著書も一枚の原稿も残さなかった。弟子たちにも、今までの物をすべて焼き捨てるように命じた。そして、今後は『相似象』以外には原稿も書かず、講演もせず、『相似象』誌上にのみ発表するものを、楢崎の真意と心得るようにと言明した。『相似象』以外から出るものがあっても、それらは決して楢崎の意思によるものではない。[24]」これが事実だとすれば、少なくとも相似象学会の発足以後においては、楢崎の「真意」を明らかにしようと思えば、この雑誌に拠るしかないということになる。

さらに次のような記述もある。「なほ楢崎が長年月にわたって心血をそそいだカタカムナの研究は、今後、唯一、相似象学会誌によって公表することになった。過去、断片的に発表されたものは一応ご破算とする。又、相似象学会誌以外に、もし記載されるものがあっても、それは、楢崎の意志ではない事を、この際附言しておく。[25]」

これらは、この雑誌の資料価値を考える上で極めて重要な記述であることは疑い得ない。ただし、このような内容を記している資料が、当の『相似象学会誌　相似象』以外には見出せず、第三者の資料に基づいて確認することはできない。とはいえ、楢崎についての資料がそもそも少ないため、「この雑誌と矛盾する記述に出会い、どちらが正しいかという判断に迷う」といったこと自体があまり起こらない。従ってこの記述は、現実にはそれほど重要な意味を持たないということも、ここで確認しておく必要があろう。

さて、『相似象学会誌　相似象』と楢崎との関係を理解する上で最も重要な点は、第 7 号発行と第 8 号発行の間に楢崎本人が死亡しているということであろう[26]。従って第 8 号以降になると、遺稿の掲載という形での例外が一部にはあるものの、基本的には楢崎による執筆はないと考えてよい。とはいえ、楢崎の生存中に発行された第 7 号までを見ても、楢崎自身による直接の執筆はほとんど見られず、大半は「楢崎述、宇野記」の形をとっている。ここに登場する「宇野」とは宇野多美恵のことである。

創刊号にこそ複数の執筆者の名前が見えるものの、それ以降は大半の文章が「文責宇野」となっており、編集後記の執筆も「宇野」とある。また編集者・発行者も「宇野多美恵」となっている上に、文章中で語られている人間関係などから見ても、（執筆者が明記されていないものも含め）ほとんどの文章を執筆したのが宇野であることが容易に推測される。

これまで見てきたように、『相似象学会誌　相似象』は外面的に見ただけでも不規則

---

24 [第 8 号：108]。

25 [第 3 号：8 註]。

26 第 8 号は楢崎の追悼号となっている。

な点が多い雑誌であるが、外部の者にとっては、内容そのものに一貫性を見出しにくく、特に初期の号ほどその傾向が強い。とはいえ、その内容にある程度通じてくると、楢崎の死去により計画が変更された部分があったとはいえ、おおよそのところは計画的に執筆がなされていることも読み取ることができる。特に第 11 号～第 16 号の部分は、かなり計画的に準備されたものだと考えられる[27]。

なお、この雑誌の入手方法だが、現在は東京都杉並区のナワ・プラサードという書店[28]でのみ取り扱われている。以前は購入に際してアンケートを記入する必要があったものの[29]、当初から雑誌の代金（表現は一定しておらず、講読費・講読会費・会誌代などと呼ばれる）さえ支払えば入手できる仕組みにはなっている[30]。

3.3 相似象学会と宇野多美恵

『相似象学会誌　相似象』の第 7 号発行と第 8 号発行の間で、楢崎が死亡していることからもわかるように、『相似象学会誌　相似象』の発行、そしてその発行者である相似象学会の誕生は、いずれも楢崎の晩年の出来事ということになる。

既に述べたように、楢崎は人生の後半においては社会の表舞台に出ることなく、長年にわたって地下に潜って密かに研究活動を続けていたという[31]。そして余命いくばくもないことを予期するようになると後継者探しを始め、最終的に宇野という人物と出会い、彼女を後継者に指名する[32]。それは 1969 年のこととされる。

『相似象学会誌　相似象』を発行してきた相似象学会とは、もともとは楢崎の研究成果などを学ぶ婦人たちのグループであり、その中心人物が宇野であったことから、

---

27 第 11 号～第 16 号ではカタカムナ文献の歌が解説されている。取り上げられているのは、第 11 号で 1～10 首、第 12 号で 11～20 首、第 13 号で 21～30 首、第 14 号で 31～41 首、第 15 号で 42～63 首、第 16 号で 64～72 首となっている。

28 東京都杉並区西荻南 3-15-3。

29 ナワ・プサードのウェブサイトには、「なお、これまでは、宇野先生のご意向もあり、縁ある方々に読んでいただけるようにとアンケート記入をして戴いておりましたが、先生亡き後、そのアンケートを読んでいただく方もなくなり、廃止いたします。したがって、もう少し自由にお買い求めになれるかと思います」とある。

30 創刊号に記された利用規約からは、宇野天然会の会員と講読会員の２種があり、後者については「会誌の講読会員は女性に限らない（講読費を納めること）」と記されている。なお後述するように、宇野天然会の当初の会員は女性に限られていた。

31 とはいえ後述するように、技術専修員養成講座を開くなどしているので、世間との交渉を完全に断っていたというわけではない。

32 このあたりの経緯については [第 8 号]を参照。

当初は宇野天然会と称していた。この宇野天然会が 1970 年に『相似象学会誌　相似象』を創刊し、第 3 号発行に際して相似象学会に改称したと見られる[33]。

4 楢崎自身による著書

楢崎に関する資料は少ないと繰り返し述べてきたが、実は楢崎には『静電三法』という著作が存在する。その一方で、第 8 号を見ると、楢崎の著作等で公刊されたものは「『技術専修員養成講座』（A5 版 260 頁、300 円、昭和 32 年（1957 年）8 月 15 日発行）ぐらいのものであろう」という記述がある[34]。『静電三法』の他に、楢崎の手になる著作がもう 1 つあるかのように思えるのだが、実は『静電三法』と『技術専修員養成講座』は同一の著作である。もともと『静電三法』の方がメインタイトルであり、『技術専修員養成講座』はサブタイトルであったと考えられる[35]。

ミキたんまい工房のウェブサイトの「楢崎皐月プロフィール」には、「昭和 32 年（1957）『技術専修養成講座[36]』全国静電研究連合会を発足する」とある。上述の『技術専修員養成講座』は「昭和 32 年（1957 年）」の発行であるから、時期が一致する[37]。「技術専修員養成講座」というサブタイトルからしても、『静電三法』はこの技術専修員養成講座におけるテキストだとするのが、最も無理のない理解だといえる。
しかし、これについては異説もある。楢崎は戦後、星一[38]が作った農業技術学校の教

---

33 詳細については[寺石 2010]を参照。

34 [第 8 号 : 66-68]。「ぐらいのものであろう」というのは、いかにもあいまいな表現であるが、楢崎の後継者とされる宇野ですら、はっきりした情報をつかんでいないことがうかがわれる。

35 現在入手可能な（2006 年に復刻された）『静電三法』に、「技術専修員養成講座」の文字はない。しかし後述する楢崎研究所のウェブサイトには、原本の写真が掲載されており、表紙に「静電三法　技術専修員養成講座」と記されている文字が読み取れる。用途を示す「技術専修員養成講座」はサブタイトルであり、メインタイトルが「静電三法」であることは明らかである。なお、最初の復刻は 1991 年で、電子物性総合研究所から発行されている。

36 おそらく「技術専修員養成講座」（下線は寺石）であろう。

37 『静電三法』の発行を翌 1958 年とする資料もある。[楢崎 2006]巻末の「著者略歴」には、「1958 年　『静電三法』発刊。静電研究会、化成主義文化の活動を本格化する」とある。また、ミキたんまい工房ウェブサイトの「楢崎皐月氏のプロフィール」にも、「昭和 33 年（1958）『静電三法技術専修員用テキスト』（植物波農法、物質変成法、人体波健康法）発行」とある。

38 1873-1951。星製薬の創設者で、星薬科大学の創立者であるとともに、衆議院議員

師を務めとされており、受講生には全国の知事推薦の青年が集められたという[39]。第8号では、上述の『技術専修員養成講座』について、「全国から知事推薦の青年を集めて教習した際の、教科書として編まれたものであり」としており、星が設立した農業学校での教科書だという理解を示している[40]。これは宇野による誤解であろうか[41]。

楢崎自身の手による『静電三法』と、楢崎自身による執筆が皆無に近い『相似象学会誌　相似象』とでは、資料としての性格は自ずと異なる。特に『静電三法』は、楢崎自身の手になる現存する唯一の著書だと推測され、彼の研究内容（の一端）を知るために極めて重要な資料であることは疑いえない。ただし内容的には、『相似象学会誌　相似象』で紹介されているものとほとんど同一である。しかも『相似象学会誌　相似象』の方がより広い範囲の内容を取り上げており、『静電三法』が研究以外の情報を含んでいないのに対し、『相似象学会誌　相似象』には、楢崎の生涯など研究以外の情報も少なからず含んでいる。

先に見たように、この『静電三法』は「公刊」されたとあるが、その存在は、楢崎の後継者とされる宇野ですら当初は知らなかったという。この点については、第8号に次のように記されている。「実は私共は、相似象学会誌発行に際し、師に、このような著作のあった事を全く知らされなかった。会誌第7号を出すに及んで、かつてその養成学校で師の薫陶を受けられた竹沢高美氏から、師自身の当時の書き込みのあるままの一書を、その講座に続いて発行された機関誌数冊と共に寄贈されて、はじめて知ったのである。[42]」

と参議院議員の双方を経験した人物。野口英世のパトロンでもあったという。なお、小説家の星新一（本名：親一）は彼の息子。

39 [第7号：114-115]。

40 仮に、技術専修員養成講座なるものが、星が設立した農業技術学校で行われていたのであれば、両者は同じことを言っていることになる。しかし星は1951年に死亡しているので、星が生存中に楢崎を教師として招いているとすれば、1951年以前のこととしなければならない。従って、1957年から始まったとされる技術専修員養成講座と同一ということは考えにくい。

41 『静電三法』はもともと分冊だったと考えられている（本稿**5. 5**参照）。従って一気に作成されたものではない可能性が高く、またそれぞれが何度も作り直されている可能性も否定できない。農業技術学校で使用した教科書に手を加えたものを、後の技術専修員養成講座で使用し、それが『静電三法』という形にまとめられたという解釈も可能ではある。

42 [第8号：66]。ここでの「養成<u>学校</u>」（下線は寺石）という表現は、星が設立した農業技術<u>学校</u>を推測させる。しかしその直後に「その<u>講座</u>」（下線は寺石）と述べてい

5 その他の情報源

以下では、これまでに見てきた『相似象学会誌　相似象』および『静電三法』以外の資料を取り上げ、その性格等について検討しておくことにしよう。なお、ここまでは書籍・雑誌を取り上げてきたが、以下ではウェブサイトについても見ておくことにする。楢崎に言及するウェブサイトは少なからず存在するが、その大半のものが『相似象学会誌　相似象』に基づいた内容を掲載している。独自の情報を示しているのは、後述する楢崎研究所のウェブサイトとミキたんまい工房のウェブサイト[43]くらいのものではないかと思われる[44]。なお、取り上げる順序は説明の都合を考慮してのことであり、資料としての価値とは一切関係がない。

5.1 松原喜一の著書

楢崎に関する情報が少ないことは繰り返し述べてきたが、『相似象学会誌　相似象』の事実上の著者といえる宇野ですら、楢崎と面識を得たのは、彼の死の 4 年ほど前でしかない。しかし松原喜一は、少なくとも楢崎の死の 20 年ほど前には面識を得ており、しかも楢崎の指導のもとで実際に研究に従事していたという[45]。そのことからすれば、本稿で取り上げる人々の中では最も楢崎に近い人物であり、楢崎をよく知る人物であることは疑い得ない。

松原の名前は『相似象学会誌　相似象』の中にも、たとえば次のような形で挙がっている[46]。「この頃の師の姿を私共（宇野たちのこと‥‥寺石注）は知らないが、一部始終を知る松原喜一氏は、後にこう語っている」。この文章を記した宇野が、自分以上に楢崎を知る人物として、松原の名を挙げていることは明らかである。また[第 8 号：290-309]に収録された、「植物波農法補遺」という楢崎の研究成果を記した文章の末

ることからすると、やはり技術専修員養成講座のことであろうか。

43 正式には「有限会社ミキたんまい工房」。

44 もちろんすべてのサイトを確認したわけではないので、「筆者が知る限りで」という限定付きである。

45 楢崎研究所ウェブサイト「実践者の声　第 1 回　楢崎皐月氏の直弟子・松原喜一さんを訪ねて」の記述による。松原は「私が楢崎皐月先生に初めてお会いしたのは、昭和 28 年の秋頃だったと思います」「その後、3 年後頃から私は化成協会事務所に出入りするようになりました」と語っているから、楢崎との出会いが 1953（昭和 28）年ごろ、楢崎の指導のもとで研究を始めたのが 1956 年ごろとみられる。なお、楢崎は 1974 年に死亡している。

46 [第 8 号：138]。

尾にも、「文責　宇野」に続いて「松原喜一氏の助言による」と記されている。

松原には『摂動[47]』と『植物波[48]』という 2 つの著書がある。このうち『摂動』には、「本誌『摂動』及び、『植物波』学を参考にして、常識を新たにして頂きたいと思います」という言葉があり[49]、この両書をセットにして捉えていることがうかがえる。そしてもう 1 つの『植物波』の巻末に、「相似象学第 1 巻『摂動』」「相似象学第 2 巻『植物波』」という記載があることから[50]、いずれの表紙にも「相似象学」という名称は記されていないものの、松原が「相似象学」というシリーズを意図していたことが理解される。

両書とも、内容のほとんどは『相似象学会誌　相似象』や『静電三法』の範囲を大きく出るものではない。そのことは、松原自身による「私は、いま科学についての論文を書くつもりはありません。ここに見る草案は、恩師故楢崎皐月先生より教わった、非常に興味ある成果の技術の数々と、実践を正しく、私の研修体験を通じて知らせようという、控え目な目的しか持っておりません[51]」という言葉からも確認できる。著者の「研修体験」とそれによる成果が含まれてはいるものの、基本的には楢崎による研究成果を紹介する内容となっている。

とはいえ、そこには『静電三法』には述べられていない内容も見られるし、また『相似象学会誌　相似象』の内容と一致することで、それが楢崎の研究成果であることを確認させるような部分も含まれている。また分量としてはわずかではあるが、楢崎の人となりが語られていたり、楢崎の写真が掲載されていたりする部分については、他の資料には見られない独自のものが含まれている[52]。

5. 2 船井幸雄の著書

船井幸雄は現代社会に大きな影響力をもつ人物であり、その名を知る人は少なくないと思われる[53]。彼は、経営コンサルタントを一応の本業としながらも、ビジネスの分野には限定されない多様な情報を社会に向けて発信し、さまざまなブームの火付け

---

47 [松原 1981]。

48 [松原 1981a]。

49 [松原 1981：5]。

50 [松原 1981a：奥付]。

51 [松原 1981：6]。

52 楢崎の写真は晩年の特定の写真のみ目にすることが多いのだが、松原の著作にはそれとは別の、より若い時点での楢崎の写真が掲載されており、その写真から受ける印象は大きく異なる。

53 船井と彼の「人間学」については、[寺石 2007]を参照。

役ともなっている。既に述べたように、船井は最近、「イヤシロチ」に関する情報を積極的に発信している。そしてそのような発言の中で、イヤシロチについての情報を初めて世に出した楢崎についてしばしば言及しており[54]、楢崎のことを「天才的な科学者」と称えている。最近になって楢崎の名前を知った人がいるとすれば、その多くが船井の情報か、そこからの間接的な情報によるものではないかと推測される。

船井によれば、彼がイヤシロチという言葉を知ったのは 1960 年ごろのことであるという[55]。船井のイヤシロチ論が彼のオリジナルではなく、もともとは楢崎の理論から学んだものであることは、船井自身がはっきりと認めている。そもそもイヤシロチという言葉そのものが、楢崎から学んだものに他ならない。

とはいえ船井の記す内容からすれば、彼は楢崎を直接には知らないらしい。楢崎についての情報は、かなりの部分で後述する深野一幸の著書[56]を引用しながら説明しており、深野の情報に依存していることを船井自身が明言している。従って、船井の著書から楢崎に関する独自の情報を得ることはほとんど期待できない。

また船井が多くの点で独自の見解を展開していることには、特に注意が必要である。船井のイヤシロチ論には、楢崎のイヤシロチ論を敷衍したものとは言い難い部分が少なからず存在する。独自の見解自体は少なくないが、それは楢崎とは直接にはつながらない、船井のオリジナルである可能性が高い。

5. 3 深野一幸の著書

楢崎に関する最も重要な資料といえる『相似象学会誌　相似象』は、基本的には会員制という形で配布されていたし、何よりもその内容が極めて難解であったため、それほど広まっていなかったらしい。近年になり、船井の影響力によって「イヤシロチ」「カタカムナ」といった言葉が広まったようだが、それ以前にカタカムナや楢崎の名前を広めたのは、深野一幸の著書『超科学書「カタカムナ」の謎[57]』であったと考えられる[58]。そもそもカタカナム文献についての著書自体が非常に少ないという事情も

---

54 船井のイヤシロチ論については[寺石 2008][寺石 2009]を参照。

55 1950 年代後半に技術専修員養成講座などが開かれており、その数年後ということになるるから、時期としては極めて自然である。

56 [深野 1993]。本稿**5. 3**を参照。

57 [深野 1993]。

58 深野自身が世に受け容れられにくいテーマについて研究していたという意味では、楢崎と似た人物だと言えないこともない。参考まで、彼の著書の一部をあげておこう（書名のみ）。『ガン・難病を治す 7 つの療法』『ここまで来た！宇宙エネルギー最前線』『文明大転換―「物質科学と貨幣経済」の間違った社会はまもなく崩壊』『波動の最前

あり、深野のこの書は、カタカムナ文献に関心がある人が必ず手にするものだったといっても差し支えない。

深野はこの中で、楢崎および彼が解読したカタカムナ文献の内容について紹介している。その説明の仕方は全体として、『相似象学会誌　相似象』よりも格段にわかりやすくなっているといえるが、その情報の大半は、深野自身が注や参考文献として示している通り『相似象学会誌　相似象』によっている。

深野は、楢崎の娘である石田（旧姓・楢崎）博子に会い、話を聞いている[59]。しかし楢崎に会ったという記述はなく、面識はないものと考えられる。このようなことからも、また深野の著書の内容からしても、これを独自の情報源と考えることはできない。

また、本書が出版されたのは『相似象学会誌　相似象』の刊行が継続されている時点であり、『相似象学会誌　相似象』に掲載された成果の全体が反映されているわけではないことにも注意が必要である。この深野の著書は、初版が 1993 年に発行されているが、この時点で『相似象学会誌　相似象』の通し番号のついた号は第 10 号まで発行されていた。従って深野の著書が参照し、また引用しているものは、すべて第 10 号までの内容となっている。

5. 4 井戸勝富の著書

楢崎の著作『静電三法』は 1991 年に電子物性総合研究所から復刻・発刊されているが、この研究所を興して『静電三法』を復刻した人物こそが、この井戸勝富である。また、前述した船井に「楢崎理論の正しさを体感させた」とされる人物でもある[60]。『静電三法』復刻の経緯について、楢崎の娘である石田（旧姓・楢崎）博子によって、「････当時の電子物性総合研究所会長の井戸様、専務でいらした河辺様共々拙宅にお越しくだされ、『是非“静電三法”としてこのテキストを本にまとめておきたい』というお話

線―新しい科学の夜明け』『全容解明宇宙と人間の謎―人類に危機が迫っている！』『「宇宙人と地球人」の超真相！―地球に危機が迫っている！』等である。

59 [深野 1993 : 242-243]。

60 「私（船井のこと････寺石注）の直感では、これからは『場』をよくするなどの根源的な科学と技術の時代だと思う。それらは、楢崎皐月さんによって世の中に紹介された。私自身、ここ二十年、もっとも興味をもって研究してきたのは楢崎さんの『電子』であり『静電三法』であり『イヤシロチとケカレチ』である。『カタカムナ』にも興味をもった。しかし現象として楢崎理論の正しいことを体感させてくれたのは井戸勝富さんだったのである」（[井戸 1998 : 2]。ただし文章は船井による）。

をいただきました」と述べられている[61]。

井戸の著書『実証こそわが人生[62]』には、彼が楢崎の理論の正しさに確信をもってから、それを実証し、さらに研究を先に進めようとして、大変な苦労を重ねてきたことが記され、その成果は何冊かの著書にも記されている[63]。井戸はそれほどまでに楢崎の理論の正しさに確信をもっていたと見られ、彼の著書には頻繁に楢崎に関する記述が登場する。

井戸が楢崎の理論に出会ったのは 1971 年のことだという。楢崎が死亡するのは 1974 年であるから、まだ存命中ではあった。しかし井戸の著書を読む限り、楢崎に会ったとか話したといった記述は存在しない。ただし井戸の著書には、他の資料からは得られない独自の情報もわずかではあるが存在する[64]。

楢崎の理論と出会った 1971 年ごろ、井戸はモラロジー研究所で活動していたが、その開発部長であった伊藤忠也という人物から、楢崎の理論の存在を教えられる。そしてその時から、楢崎の理論を生かした電子水や農業といった分野へのチャレンジを始め、やがて自らが開発した電子水の飲用によって健康を取り戻すなど、自らの身体でその正しさを実感するようになる。

こうして井戸は楢崎理論の価値を確信し、やがて『静電三法』を復刻するに至る[65]。『静電三法』については、「三千部印刷されたそうですが、出版社から正式に出版された本ではありませんでしたから、散逸してしまって、長い間、どこのだれが持っているのか所在がわかりませんでした[66]」「『静電三法』はテキストとして配布されたものですから、『静電三法技術専修員用テキスト』として一冊の本になるまでは、全体がひとまとめにされていなかった形跡があります。おそらく何分冊かに分けて配布された

---

61 『静電三法』の「発刊にあたって」([楢崎 2006：Ⅰ-Ⅲ])。

62 [井戸 1998]。

63 [井戸 1993]、[井戸 1994]、[井戸 1995]、[井戸 1998]など。

64 後述する『静電三法』に関する情報などはその一部である。

65 『静電三法』の本との出会いについては、次のように述べられている。「ある日、私が留守をしていた間にだれかがきて、『この本があれば、何かのときに役に立つかもしれない』といい残して、置いて行ったというのです。留守中にそんなことがあったとは知らず事務所に戻った私は、机の上に何気なく置かれている本を見て、腰を抜かすほど驚きました。目の前にはまぎれもない『静電三法技術専修員用テキスト』という題がありました。(中略)分冊の形で読んだ『植物波農法』もあります。『人体波健康法』もあります。伊藤先生から聞いただけの『物性変性法』も確かに収録されています」([井戸 1998：59])。

66 [井戸 1998：56]。

のでしょう。一部分は伊藤先生（伊藤忠也のこと‥‥寺石注）から見せられましたから、ある程度流布していたのでしょうが、本全体は見たことがありませんでした」とある[67]。

5.5 楢崎研究所のウェブサイト

「楢崎研究所」という名称自体が注目されるが、これは楢崎に「関する」研究をする所と見られ、楢崎が「直接関わった」（例えば設立した、所長を務めた等の）研究所という意味ではないことを、始めに明記しておく。

楢崎が直接関わっていないとすれば、どのような組織が運営しているのかが気になるところであるが、この研究所はシーエムシー技術開発株式会社に所属する組織であることが、種々の点から確認できる。このシーエムシー技術開発株式会社は、楢崎の『静電三法』の二度目の復刻を行っており[68]、住所やメールアドレスなどからも、両者の関係を確認することができる[69]。
楢崎研究所のウェブサイトのトップページを見ると、まず「楢崎皐月の『静電三法』

---

67 [井戸 1998 : 58]。これらは井戸の著書からのみ得られる情報であり、他の資料には見られない。

68 シーエムシー技術開発株式会社のウェブサイトによれば、代表取締役は河邊憲次となっている。二度目に復刻された『静電三法』の「発刊にあたって」（[楢崎 2006 : Ⅰ-Ⅲ]）には、「‥‥当時の電子物性総合研究所会長の井戸様、専務でいらした河辺様共々拙宅にお越しくだされ、『是非“静電三法”としてこのテキストを本にまとめておきたい』というお話をいただきました」とある。ここに登場する「井戸様」が最初の復刻を行い、また本稿**5.4**で取り上げた井戸勝富であり、「河辺様」が二度目の復刻を行った、シーエムシー技術開発株式会社の代表取締役・河邊憲次であると考えられる。なお、上記の「発刊にあたって」は楢崎の娘・石田（旧姓・楢崎）博子によるものである。

69 楢崎研究所の住所は「岐阜県各務原市テクノプラザ 1-1-206」、シーエムシー技術開発株式会社の住所は「岐阜県各務原市テクノプラザ 1-1」となっている。また前者の電子メールは、シーエムシー技術開発株式会社内のアドレスになっている。

楢崎研究所のウェブサイトには『静電三法』のページがあり、購読方法のみならず、ある種の特典のつく購読会員といったものが設定されている。一方、シーエムシー技術開発株式会社のウェブサイトでは、出版物のページに『静電三法』が登場するが、それをクリックすると楢崎研究所の同じページに至る。また、楢崎研究所ウェブサイトの「楢崎皐月」のページを見ると、シーエムシー技術開発株式会社から復刻された『静電三法』巻末にある「著者略歴」とまったく同じの略歴が掲載されている。

の実践と探究」と記されており、その下には次のような文句が続く。「楢崎研究所では、皆さまのご支援と御協力を得て[70]／『静電三法』について次の活動を進めてまいりたいと考えております。／1. 静電三法の普及／2. 研究者、実践者の紹介／3. 楢崎皐月に関する情報、資料等の公開、発刊／4. 静電三法に関する研究・実践の紹介／5. 研究者、実践者との交流、研究会の開催／6. 21 世紀の科学技術への応用利用の提案／7. 研究・実践の拠点づくり」。この記述を見ただけで、この研究所の姿勢はおおよそ読み取ることが可能であろう。

この研究所のウェブサイトには、楢崎に関する情報が散見される。「実践者の声」のページには、本稿執筆時点で 8 人の実践者が紹介されているが、その中には楢崎に直接師事した松原喜一[71]も含まれており、他の資料からは得られない内容もかなり含まれている[72]。

このウェブサイト中の「開設にあたり」のページには、次のような文章が記されている。

> このウェブサイトは、戦前、戦後に活躍した物理学者、楢崎皐月の残した数々の偉業を紹介すると共に、楢崎皐月の代表的な書である「静電三法」を正確に広く世に伝えていくために、「静電三法」の発刊にあわせ 2006 年 7 月に立ち上げたサイトです。静電三法は"宇宙対向の静電気"という自然界の潜在勢力を活用した農業、工業そして人体の健康に関するさまざまな改善技法が記述された技術書です。楢崎氏の遺志を引き継ぎ、静電三法を研究、実践する方々への情報提供に勤めるとともに、このサイトを訪れた方々の相互の情報交換の場を提供しています。

5. 6 関川二郎の著書

関川二郎は、『カタカムナ解読の軌跡』『神智学とカタカムナ』『中国の古代思想とカタカムナ』『発生学とカタカムナ』『カタカムナ単音辞典』などの著書をもつ。いずれも、カタカムナに関心をもつ人々にとっては極めて興味深いタイトルではないかと推測される。

特に『カタカムナ解読の軌跡』などは、タイトルからして、楢崎がどのような手順でカタカムナ文献を解読していったかに関する、詳細な情報が得られることが期待されよう。しかし実際は、楢崎がどのようにしてカタカムナ文字によって記されたカタカムナ文献を読み解いていったかを、「関川自身の体験から推測したもの」に他ならない。従って、カタカムナ文献の研究には役立つこともあるであろうが、楢崎について

---

70 本文中にスラッシュ（／）で示した部分は、実際にはすべて改行である。

71 本稿**5. 1**を参照。

72 その一部は本稿**2. 1**でも取り上げている。

の情報が得られるわけではない。そして関川自身、カタカムナに関する情報は『相似象学会誌　相似象』から得ていることを明示している[73]。従って、これらの著書から楢崎に関する情報を得ることは、ほとんど期待できない。

なお、上記の著書はいずれも「潜象道シリーズ」に含まれるもので、このシリーズは1～10の番号が付された10冊と、別冊および特集号の計12冊からなる。いずれも新書版の大きさで、それぞれは48～96ページとなっている。このシリーズの企画は潜象道研修塾となっており、本文から、関川がこの塾の主宰者であることがわかる[74]。

5.7 阿基米得の著書

阿基米得には『謎のカタカムナ文明ー秘教科学の最終黙示』という著書があり、著者については巻末に、「現在[75]　科学ジャーナリストとして第一線で活躍中。イルミネ・サイエンス協会[76]を主宰」とある。

本論は「カタカムナ文献とは何か」「風景工学はエコロジーを超える」「錬金術は復活する」「性の魔術が人類を救う」の4章からなり、新左翼・風水・ダウジング・冶金術・錬金術・グルジェフ・ライヒ・今西錦司等々、極めて広範な内容や人物がカタカムナと関連づけながら論じられている。

本書の内容から、著者は楢崎には会っていないと見られ、楢崎の経歴についても推

---

73 たとえば「私（関川）は、楢崎の唯一人の後継者である、宇野多美恵が主宰する相似象学会の会誌を通じて、これを丹念に検討した結果‥‥」といった記述がある。([関川 1996 : 14]。)

74 このシリーズの1冊目（[関川 1996 : 5]）に、「私（関川）が主宰する潜象道研修塾が、『何を目指し、何を学んでいるのか？』の概要を述べさせて戴きます」とある。また目次のページにも「潜象道研修塾　関川二郎」と記されている。同書の末尾（[関川 1996 : 34]）にある「潜象道シリーズの予告」には12冊の書名が列記され、それが各月に発行される予定であることが記されている。同時に、「シリーズ（Ⅸ）は、波動量が一定数以上に達した人でなければ、お分け致しません」とあり、さらに「シリーズ（Ｘ・ＸＩ）は、上級講習修了者に限ってお分け致します」とある。

75 発行は1981年。『相似象学会誌　相似象』については「現在9号まで発行されている」とある（[阿基 1981 : 25]）。

76 イルミナ･サイエンス協会については、本書「あとがき」の中で「寺田寅彦の新理学を中心に、楢崎皐月の相似象学、桜沢如一のＰＵ原理、今西錦司の進化論、小田切瑞穂の潜態論など、日本土着の優れた科学や、ゲーテ、グルジェフ、シュタイナー、ライヒ、ケルブランほか、海外のオカルト・サイエンスや異端の科学の大系を探求するための作業に取り組んでいる」とある（[阿基 1981 : 257]）。

測を交えて語っている。また「あとがき」には、「著者の相似象学に関する質問に答えていただいた相似象学会会長宇野多美恵氏に感謝する」とある[77]。とはいえ多方面にわたる独自の調査がなされている点は大いに注目される。楢崎の人間関係や、彼が開発した農業技術が与えた影響などについては、他の資料には見られない情報も少なからず含まれている。

5.8 ミキたんまい工房ウェブサイト

ミキたんまい工房[78]の「たんまい」とは炭素埋設のことと見られる。楢崎が示した大地の電位を改良する方法の中で、最も代表的なものとして知られるのが炭素埋設であるが、ミキたんまい工房はそれを行う会社ということになる[79]。実際に、ミキたんまい工房のウェブサイトには、「大地電位の調査法」「大地電位の改良法」などに加えて、「カタカムナとは？」といったページもあり、カタカムナ文献やその解釈などにも言及しているが、基本的には『相似象学会誌　相似象』の内容を出るものではない。

ミキたんまい工房は2001年に「ひびき研究会」なるものを発足させている[80]。同社のウェブサイト中に紹介されている「当会の目的」には「当会は、炭素質埋設法をはじめとするイヤシロチ化技術の研究・普及・啓蒙・実践を通して、地球環境の保全や人類の身体的・精神的・社会的な健康を実現することを目的とします」とある。
ウェブサイトの中には「楢崎皐月氏のプロフィール」というページもある。年表風の簡潔なものであるため、詳細な情報を得ることはできないが、他の資料とは異なる年

77 [阿基 1981：257]。

78 正式には「有限会社ミキたんまい工房」。

79 ミキたんまい工房のウェブサイトには、「現代の深刻な環境問題やエネルギー問題の解決策は、クリーンで安全なしかも無尽蔵にあるエネルギーを、カタカムナのサトリによって実用化することが、早くて確実な道であると考えます。当社は、このカタカムナのサトリにヒントを得て、楢崎皐月氏が編み出した炭素質埋設技法を手本に、イヤシロチ化手法を進めております」と記されている。

なお大地電位を改良することを、最近は「イヤシロチ化」と呼ぶことが多いが、この言葉は前述の船井によって広められたものだと考えられる。イヤシロチ化を行う会社としては、このミキたんまい工房と並んで株式会社トータルヘルスデザインがよく知られている。ウェブサイトを見る限り、前者は楢崎の考えに、後者は楢崎よりも船井の考えに基づく傾向が強いように思われる。

80 事務局がミキたんまい工房内に置かれていること、会計をミキたんまい工房が一括して管理していることなどから、ミキたんまい工房が母体となっていることは明らかである。

代を挙げている部分がある点などは注目される。しかしその情報源については明らかではない。ウェブサイト中には、社長の高野幸司が楢崎を「師」と呼ぶ文章も見られるものの、高野は1960年生まれとあるので、1974年に死亡した楢崎に直接師事していたとは考えにくい。

5.9 服部真幸の著書

服部真幸には、『僕達の覚醒ーカタカムナが伝える偶然の真理』と『カタカムナ人からの癒し』という、カタカムナをテーマにした2冊の著書がある[81]。大変ユニークな内容だが、カタカムナとの出会いに関しては、楢崎のみならず相似象学会とも直接には何らかかわりがない。従って、楢崎に関する独自の情報を得ることはできない[82]。

6 むすびとして

これまでに見てきたように、楢崎に関する独自の情報は少ない。ある程度まとまった情報があるのは、(1)『相似象学会誌　相似象』、(2)楢崎自身の著書、(3)松原喜一の著書、(4)阿基米得の著書に限られる。その中で情報量が群を抜いて多いのは(1)『相似象学会誌　相似象』である。単一の情報に多くを依存することによる危険性はあるものの、これに匹敵する情報がないという現状では、『相似象学会誌　相似象』に多く依存することは避けられないといえよう。とはいえ一部の情報については、(2)楢崎自身の著作、(3)楢崎に師事し、彼のもとで研究をしていた松原喜一の著作などによって確認することが可能である。また周辺の情報については(4)阿基米得の著書から得ることが可能である。この他に、(5)井戸勝富、(6)楢崎研究所、(7)ミキたんまい工房などの情報にもオリジナルなものが一部に含まれているので、これらも補助的に使用することができる。

なお、(8)船井幸雄の著書、(9)深野一幸の著書、(10)関川二郎の著書の著書は、その内容の大半が(1)『相似象学会誌　相似象』に基づいている[83]。従って、イヤシロチ研究やカタカムナ研究に利用することは可能であっても、楢崎についての研究となると役立つ可能性は低いといえる。

---

81 [服部 1997]および[服部 1999]。

82 [服部 1997]によれば、「木津ちゃん」と呼ばれる友人が、自動書記のように不思議な文字を書き出すのだが、その文字がカタカムナ文字だったという。なお本書に「木津ちゃん」として登場する木津龍馬については彼のウェブサイトを参照。木津には数冊の著書もある。

83 (8)船井の著書だけは、同時に(3)松原の著書をも利用しており、出典を明記した引用も見られる。

最後に、これらの著者の中で楢崎と面識があったのは、(1)『相似象学会誌　相似象』の事実上の著者である宇野多美恵[84]と、(3)松原喜一だけと見らることも確認しておきたい。

参考文献・参考ウェブサイト

本文および注における「第〇号」という記載は、すべて『相似象学会誌　相似象』の号数である。

阿基米得 1981　『謎のカタカムナ文明ー秘教科学の最終黙示』徳間書店
井戸勝富 1993　『健康の秘訣は電子にあった』かんき出版
井戸勝富 1994　『電子水があなたを変える！』メタモル出版
井戸勝富 1995　『美肌の秘密は「水」にあった』ベストセラーシリーズ
井戸勝富 1998　『実証こそわが人生』致知出版社
宇野多美恵編 1970　『相似象学会誌　相似象』第 1 号
宇野多美恵編 1971　『相似象学会誌　相似象』第 2 号
宇野多美恵編 1971a　『相似象学会誌　相似象』第 3 号
宇野多美恵編 1972　『相似象学会誌　相似象』第 4 号
宇野多美恵編 1973　『相似象学会誌　相似象』第 5 号
宇野多美恵編 1973　『相似象学会誌　相似象』第 6 号
宇野多美恵編 1974　『相似象学会誌　相似象』第 7 号
宇野多美恵編 1975　『相似象学会誌　相似象』第 8 号
宇野多美恵編 1979　『相似象学会誌　相似象』第 9 号
宇野多美恵編 1980　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 10 号
宇野多美恵編 1981　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 10 号別冊
＜サヌキ・アワ＞（性）のサトリについて
宇野多美恵編 1984　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』特集号
ゲーテ「ファウスト」と＜カタカムナ＞
宇野多美恵編 1985　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊
感受性について（その 1）
宇野多美恵編 1986　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊

---

84 厳密にいえば、『相似象学会誌　相似象』（特に第 1 号）には宇野以外にも複数の著者がいる。その著者たちはいずれも相似象学会のメンバーであろうから、楢崎とは面識があったと考えられる。ただし、それらの著者たちの執筆した文章は、『相似象学会誌　相似象』全体の中ではごくわずかである。

感受性について（その2）
宇野多美恵編1987　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第11号別冊
感受性について（その3）
宇野多美恵編1988　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第11号別冊
感受性について（その4）
宇野多美恵編1989　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第11号別冊
感受性について（補遺その1）
宇野多美恵編1990　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第11号別冊
感受性について（補遺その2）
宇野多美恵編1992　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第11号別冊
感受性について（補遺その3）
宇野多美恵編1993　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第11号別冊
感受性について（補遺その4）
宇野多美恵編1994　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第11号
宇野多美恵編1995　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第12号
宇野多美恵編1997　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第13号
宇野多美恵編2001　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第14号
宇野多美恵編2003　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第15号
宇野多美恵編2004　『相似象学会誌　相似象』第16号
関川二郎1996　『潜象道シリーズ1　潜象道略儀』博進堂
関川二郎1996a　『潜象道シリーズ3　カタカムナ解読の軌跡』博進堂
関川二郎1996b　『潜象道シリーズ4　神智学とカタカムナ』博進堂
関川二郎1996c　『潜象道シリーズ5　発生学とカタカムナ』博進堂
関川二郎1997　『潜象道シリーズ6　中国の古代思想とカタカムナ』博進堂
関川二郎1997a　『潜象道シリーズ特集号　カタカムナ単音豆辞典』博進堂
寺石悦章2007　「船井幸雄『人間学』の展開」、
『四日市大学総合政策学部論集』第6巻第1･2合併号、pp.1-19
寺石悦章2008　「船井幸雄の聖地論」
『四日市大学総合政策学部論集』第7巻第1･2合併号、pp.23-39
寺石悦章2009　「船井幸雄の『イヤシロチ探訪セミナー』」、
『場所をめぐる宗教的集合記憶と観光的文化資源に関する宗教学的研究（平成18年度～平成21年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、山中弘研究代表）』、pp.78-94
寺石悦章2010　「楢崎皐月の生涯について」
『四日市大学総合政策学部論集』第8巻第1･2合併号（掲載予定）

楢崎皐月 2006　『静電三法』シーエムシー技術開発株式会社
服部真幸 1997　『僕達の覚醒ーカタカムナが伝える偶然の真理』文芸社
服部真幸 1999　『カタカムナ人からの癒し』光雲社
深野一幸 1993　『超科学書「カタカムナ」の謎』廣済堂
船井幸雄 2004　『イヤシロチ』評言社
船井幸雄 2005　『イヤシロチⅡ』評言社
松原喜一 1981　『摂動』松原喜一
松原喜一 1981a　『植物波』松原喜一

株式会社トータルヘルスデザイン　http://www.thd-web.jp/
木津龍馬オフィシャルサイト　http://www.kizu.info/profile.html
シーエムシー技術開発株式会社　http://www.cmctd.co.jp/
楢崎研究所　http://www.narasaki-inst.com/index.htm
ナワ・プラサード　http://www.nabra.co.jp/hobbit/nawaprasad/default.htm
有限会社ミキたんまい工房　http://www.tanmai.co.jp/ktkmn/narasaki.html
同上　http://www.iyashirochi.jp/